

公務員から見た経営システム工学

卒業年次	2002 年
卒業研究室名	棟近研究室
名前	田中正和
勤め先	新潟県

1. はじめに

私は、現在、新潟県職員（職種：一般行政）として勤務しており、平成 18 年 4 月現在で入庁 5 年目となります。在学中は、棟近雅彦教授のご指導を受け、平成 14 年に修士課程を修了しました。

公務員というと、「毎日、5 時に帰れてうらやましい」や「ルーチンワークしかなくてつまらなそう」というイメージを持たれる方がいるかもしれません。（注：このイメージは正しくありません。）また、公務員は、経営システム工学科卒業生の進路先（業種別）を大学の Web サイトで見ると、「その他」7%に含まれており主な進路先とはいえません。そのため、経営システム工学科 OB・OG の方や在学中の方であれば、「経営システム工学科で学んだことは、全く役に立っていないのでは」、言いかえると、「公務員の仕事と経営システム工学とは何のつながりもないのでは」、と考えられているかもしれません。

しかし、本当に公務員と経営システム工学につながりはないのでしょうか。仮にあるとしたらどのようなもののでしょうか。本稿では、私の仕事内容の紹介を通じて、その点について考えてみたいと思います。

2. 私の仕事と経営システム工学

2.1 情報分野について

入庁時から 3 年間、私は総合政策部情報政策課に配属されました。情報政策課とは、地域情報化や行政情報化を進める課です。私の主な仕事の一つは、給与事務に関連した給与システムの運用で、特に給与計算を担当しました。

給与事務とは、まず、各課の給与担当者が給与システムに各課職員の給与計算の基礎となるデータを入力し、次に、情報政策課担当者が給与計算処理を行った結果、各職員に支給する給与を確定するものです。この事務において、私は、具体的に次の事項を行いました。

給与システムの運用スケジュールの作成

コンピュータによる給与計算処理

プログラム修正に関する作業

については、データ入力期間、給与計算処理、給与支給日などを考慮して作成しました。については、給与の支給額の計算はもちろんのこと、併せて、入力されたデータのチェック処理やテスト計算処理を何度も行いました。については、給与システムの改善や給与の制度改正に伴い作業しました。

以上の仕事を振り返ってみると、経営システム工学科で学んだことが生きていると感じたことが2つあります。

1 つ目は、システムは、コンピュータだけでなく、人間や技術なども含めた多様なものからなるという考え方です。やでは、事務を円滑に行うために、給与担当者の給与システムに対する要望に耳を傾けました。その上で、技術面などからその要望の実現方法を検討したり、要望を取り入れるのが難しい場合はその理由を給与担当者に説明したりしましたが、その際にこの考え方が有用でした。

2 つ目は、人間はミスをするため、ミスの発生しにくい、ミスが発生しても重大な結果に至らないような工夫が重要という考え方です。では、事務を正確に行うために、給与システムの機能面や運用面において様々なミス防止策を講じましたが、その際にこの考え方が有用でした。

2.2 健康・医療分野について

入庁4年目の4月に異動し、平成18年3月現在で配属されているのが、三条健康福祉環境事務所です。これは、新潟県三条市にある地域機関で、保健所と福祉センターを統合したものです。この職場では、情報・統計に関する仕事を中心に行っています。

先日も、管内の死亡率（注：死亡数を人口で除したもの）などの調査結果を共有し、健康課題を検討することを目的とした会議があり、その資料作成においてデータ解析を手伝う機会がありました。一例を挙げると、市町村別、男女別、死因別の死亡数のデータがあった場合に、どんなデータ解析をすればよいかを検討し、これについては、

男女に分けて、

市町村別の年齢調整死亡率を計算し、

検定を行えばよい

という結論に達しました。その結果、ある市町村の男性において、管内の他の市町村よりもある死因でなくなる方が多い（少ない）ことを明確に捉え、該当市町村にそのことを示すことができました。

なお、年齢調整死亡率とは、人口の年齢構成の差異を取り除くための処理をした死

亡率です。何も調整を行わない死亡率（粗死亡率）の場合は、高齢者の多い市町村では高くなり、若年者の多い市町村では低くなる傾向がありますが、この年齢調整死亡率を用いることによって、年齢構成の異なる集団であっても、年齢構成の相違を気にせずに、より正確に市町村比較をすることができます。さらに、検定を行えば、その年齢調整死亡率が、統計的に意味のあるほど大きな値かどうか判定できます。

統計的方法を用いなくても、何らかの情報を得ることはできると思いますが、統計的方法を用いれば、より有益な情報を得て、きめ細かな行政サービスにつなげられる可能性を感じた経験でした。

3．まとめ

結論としては、2の事例のように、公務員の仕事と経営システム工学にはつながりがあると思います。言いかえると、公務員の仕事に経営システム工学が生かされており、経営システム工学における考え方が生かされる場合と、経営システム工学における手法が生かされる場合があると考えられます。

また、経営システム工学は、公務員の仕事に意識的に適用されていなくても、気が付いたら適用されていたということがあると思いました。このことは他の業種の仕事にも当てはまる場合があるのではないかと思います。理由は、私自身が、今回、公務員の仕事と経営システム工学のつながりについて考え始めたとき、直感的には何のつながりもないのではないかと思いましたが、自分の仕事をよく振り返ってみたところ、「こんな場面で経営システム工学の授業で学んだことが役立っていたのか」という発見があったことです。

4．おわりに

3の視点で見ると、様々な分野の仕事において経営システム工学は適用可能といえると思います。今回、私の仕事と経営システム工学のつながりを考えたことで、そのことに気付くことができました。

新潟県では、3～5年のサイクルで異動があります。私はこれまで、2つの課に勤務しましたが、いずれの課でも感じたことがあります。それは、どの職員も使命感を持ち、前例にとらわれず、県民の方に満足してもらえる仕事をしようと努力しているということです。

私自身も、今後どの課に配属されたとしても、より県民の方に満足してもらえる仕事をするため、在学中に棟近先生を始め多くの方々からご指導いただいた経営システム工学の考え方や手法を生かして、一所懸命がんばりたいと思っています。